新刊紹介

倉野憲司博士著『現代語訳古事記』を読む

井手恒雄

倉野博士の現代語訳古事記が河出書房の現代語訳日本古典文学全集の第一巻（第十七回配本）として世に出た。

本書は、一つの古典文学の現代語訳であつて、そのかぎりにおいて、原文のよめない、いわゆる素人の読者に贈られる入門の書として役立てばそれでよいもの、とも考えられようが、しかもそれ以上のものを持つと思われるふしがあるので、ここに紹介したい。

博士の現代語訳が、単なる入門書ではないというのは、周知の通り、古事記は全部が漢字ばかりで書かれており、それをどうよむかということが、その学問的研究の根本的な課題となつているそれが正しく読めてはじめてその現代語訳も可能なのだから、その現代語訳は他の作品の場合とは比べものにならぬ困難をともなうものとなる、というわけで、博士が自ら（この種の書物にありがちな代作でなく）一夏を費した本書は、博士の古事記学の貴重な成果を示すものとして、専門家にとつても注意すべきものであろうと思うのである。

本書には詳しい解説があり、古事記は何であるかというようなことも、あわせて論ぜられているが、何といつても博士の本領は訓法の研究にある。いつてみれば本居宣長の「古訓古事記」に対する現代の「新訓古事記」を書き得る人は、博士のほかにあるまい。そういう意味で今日期待される業績の一端が、このような形であらわされたことは、よろこばしい。

「まえがき」に曰く、「意外に思われるような解釈が目につくかもしれない。なぜそんな意味になるだろうと疑問を抱かれる節がかなりあるだろうと思われる。しかしそれは未発表の私見や、まだ読者に知られていない他人の新説を取り入れたからであつて、私としては現代において最もよいと信じた説に拠つたつもりである。たとえば亀井孝君の未発表の新説など取り入れているが、それらを一々断り得なかつたことを、お詫びしたい。」と。

例えば崇神天皇の条の有名な「御真木入日子はや」の歌の冒頭の「こはや」が訳文にないのは真福寺本の傍註及び特殊仮名遣によつて衍字とする博士の自説によるものである。「こはや」の「こ」の仮名が「古」であつて「許」でない以上これまでのように「是はや」（これはまあ）とするのはもともと無理である。またたとえば、仲哀天皇の条の「酒楽の歌」の「久志能加美」が、本書では「酒の司（くしかみ）」とよまれ「酒のつかさ」と訳されている。これは従来「くしの神」とされたものであるが「加美」は上代の特殊仮名づかいからすれば「神」とは解しがたい。そこで亀井孝氏（一橋大学教授）によつて「奇の醸（くしか）み」とされ、さらにそれが博士によつて「酒の司」とされるのである。更にはまた「伊勢の海の、意斐志爾」を従来の説の「伊勢の海の、大石に」に従わず、「伊勢の海の、生（おし）ひ石（し）に」とされたのは、亀井氏の新説を是とさ

れたからだとのことである。

とにかく古事記が新らしく問題にされ、そして何よりも科学的な研究の対象として、探求されようとするときである。古事記を正しくよみ、正しく解することに生涯をかけた博士の訳書は、入門書以上の価値を見出されてよかろう。（昭和三〇、一二、一五日、河出書房発行、B6一九四頁、二四〇円）

亀井孝氏の著者宛て書翰

益々御健勝にて御越年の上御研讃に余念なく御過しの御事と存じ上げます。

この度は河出版現代語訳日本古典文学全集のうちの古事記御恵与に預り厚く御礼申上げます　永年の御研究の結晶の一端をこのやうな形で学界にのみならずひろく日本国民にお示し下さつた事を嬉しく存じます

このやうなしごとこそ専門家だけを相手の学術書よりはるかに難しいものと考へ御苦労の程さぞかしと拝察致します　小生の名を御出し下さつた事も何かと私をお導き下さる御厚誼の一端と感謝申上げます

例のクシノカミ（甲）は、なるほど「酒の司」後世の「ゝゝの守」などのカミならば通るわけで小生の「奇の醸み」との見解は或はむしろいけないかも存じません、しかし、私は、自説に泥むのではなく、純粋に客観的に考へて、どちらがいいのか、口訳では、どれかをとらなければなりませぬが迷はざるを得ません、そして、実は、かういふ点で、学問的論文の方がいはばのんきかも存じません、論文なら、かうも解される、又かうも解されると書いても通るわけでございます（教室での講読では、かういふ点、ほとほと閉口でございます、）

前申述べなかつたかと思ふ一条、一つ書き添へる事と致しませう「つぎねふ山代女」の第二番の方の「ナガイヘセコソ」は「言へせこそ」といふ文法があり得ませうか、「汝が家背こそ」では、をかしうございませうか　御高論にあづかり得れば幸甚と存じます

解説も有益によませて頂きました　敬具

右御礼まで

（昭和三十一年一月）十日

亀井　孝拝

倉野憲司先生

侍史